

令和 4 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01051

研究課題名（和文）第一次世界大戦から1930年代までのロシアにおける身体 労働・医療・モラル

研究課題名（英文）The body in Russia from the First World War to the 1930s

研究代表者

池田 嘉郎（Ikeda, Yoshiro）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・准教授

研究者番号：80449420

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：身体のありようは、社会や文化、それに時代によって異なるものである。同時にまた身体のありようは、人間生活の基幹をなすものとして、当該社会の特徴を集約的に現す。本研究では第一次世界大戦期から1930年代という、近代から現代への転換をなす時期のロシアにおける身体のありようを、労働・医療・モラルという切り口から検討した。その結果、ロシアにおいては、国家と社会の両者が不分明なままに、個人の身体に働きかける傾向が顕著に見られることを明らかにした。具体的には、第一次世界大戦からロシア革命期にかけての医療衛生、また1920年代から30年代の性規範について、とくにそのことが指摘できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、ロシアは国際規範を無視して、ウクライナに対して戦争を行なっている。ロシア軍はウクライナ市民・兵士、さらには自国兵士をも過酷に扱っている。われわれはロシアの行為を野蛮とするだけでなく、その行動を支える価値体系を身体観の次元から検討すべきである。そのときはじめてロシアの行動を支える論理が明らかになる。本研究は20世紀前半のロシアで、一個の市民としての身体の自立性が、国家＝社会との明確な境界線をもたなかったことを解明した。現代ロシアの前提が当該期にある以上、本稿の研究は現代ロシアの国家・社会・市民の関係、そしてとくにロシア社会にとっての戦争や兵士の位置づけを考える上で大きな意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：The state of the body differs depending on society, culture, and the times. At the same time, the state of the body, as the basis of human life, collectively reveals the characteristics of the society. In this study, we examined the state of the body in Russia from the perspective of labor, medical care, and morals during the period from the First World War to the 1930s. We proved that in Russia, defined unclearly, both the state and the society regulated the individual's body, incorporating it to the official sphere, which was itself not defined from the private one. Specifically, I examined the state of body from the perspective of the medical hygiene from World War I to the Russian Revolution, and the sexuality norms of the 1920s and 30s.

研究分野：近現代ロシア史

キーワード：ロシア史 ソ連 身体 第一次世界大戦 セクシュアリティ

1. 研究開始当初の背景

1917年の革命を経て、ロシアは帝政からソヴィエト体制へと転換した。従来はこの過程について、革命による「断絶」という理解が主になされていたが、近年の研究はそうした見方の相対化を進めている。ひとつには、第一次世界大戦において、革命後につながるような変動がすでに始まっていたということが指摘された (ex. Peter Holquist, *Making War, Forging Revolution: Russia's Continuum of Crisis, 1914-1921*, Cambridge, Harvard University Press, 2002)。もうひとつには、近現代ロシア史の長期的な時間の中で、帝政期とソヴィエト期には構造的な連続性や相似性が看取されるということが重視されるようになった。たとえば、非人間的な制度よりも人間関係が政治において規定的な役割を果たしていたという点 (J. Arch Getty, *Practicing Stalinism: Bolsheviks, Boyars, and the Persistence of Tradition*, New Haven, Yale University Press, 2013)あるいはまた、身分制の廃止後も、法的に平等な市民ではなく、職業・階級・民族などを基準にして編成された諸団体が政治の単位となったという点 (池田嘉郎『革命ロシアの共和国とネイション』、山川出版社、2007年)が挙げられる。

近年のこうした研究動向は、革命による断絶という単純な見方を克服することで、研究史を進展させた。だが、こうした研究動向の成果を踏まえた上で、われわれはさらに、近現代ロシア史の理解を深めるために、次のことをあらためて考えねばならない。たしかに近現代ロシア史には、体制の違いを超えて連続性や相似性が見られるのだが、そのことと第一次世界大戦、革命・内戦、ソヴィエト体制のもとでの社会改造という巨大な社会変動とは、どうすれば統合的に説明できるのであろうか。ここでは、断絶か否かという二者択一的な議論を行なうのではなく、変化と、変化の中における旧来の要素の持続や再生産との複合的な関係を、実証的に分析することが必要である。

そのための一つの方法としては、人間生活の基本的な単位に視点を据えることが有効であろう。そこでは変化の要素と持続・再生産の要素とは、密接に結びついて現れることが予想されるからである。そうした基本的な単位となるのは個々の人間であるが、本研究課題はとくに、人間の身体の経験に焦点を当てたい。ここで身体の経験という場合、身体はどのように観念されたのかと、身体はどのように扱われたのかの二つを合わせて考えている。こうした身体の経験に焦点を当てることで、抽象化された人間ではなくて、生きた一人一人の人間についてより深く検討することが可能になるであろう。第一次世界大戦から、スターリン体制が基本的完成を見る1930年代末までの期間において、ロシア・ソ連に生きた人々の身体はいかなる経験を経たのか。これが本研究課題の核心をなす問いである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、人間生活の基本をなす身体の経験に着目して、第一次世界大戦から1930年代末までのロシアにおける社会変動の特質を解明することである。この時期のロシアにおける変動は、社会関係の根本的な再編成、広大な空間における人口の移動、それに数百万人に及ぶ死者をもたらしたという点で、20世紀史上特筆すべき出来事である。社会主義や一党独裁といった新しい体制を生み出した点でも、同様のことがいえる。この変動はまた、その規模や急進性にもかかわらず、それ以前の政治・社会体制における諸特徴を部分的に引き継ぎ、あるいは再生産したという点でも、ユニークな現象であった。

この変動のもつ、変化の側面と持続の側面が緊密に結び合う複雑な性格を理解するためには、国制やナショナリズムといった巨視的な観点からの、長期的な推移の検討にくわえて、日常生活に密着した微視的な観点からの検討も必要となる。本研究課題は、人々の身体の経験に焦点を当てることで、そうした微視的な観点からの分析を行なう。単に微視的な観点を打ち出すだけではなく、巨視的な観点において看取される動きが、身体の経験にいかなる作用を及ぼしたのかについても検討する。

身体の経験は社会生活のあらゆる領域に関わるため、分析の対象が拡散しないように注意する必要がある。本研究では身体のあり方がとくに直接的に問われる領域として、医療・労働・モラルに焦点を当てる。これらの領域では、身体をめぐる観念や、身体に対する扱いは、規範の形をとって体系化されることが多いといえよう。もちろん、規範として明確に意識されない諸側面についても分析を行なう。また、他の諸分野、たとえば軍事・スポーツ・祝典・刑罰なども、必要に応じて分析の対象とする。さらに、身体研究はナショナリズム、それにジェンダーと不可分であるので、それぞれについての研究成果から摂取すべく努める。

本研究は、第一に、20世紀ロシア史における体系的な身体研究として、学術的独自性と創造性をもつ。先行研究ではユートピアの実験やパレードなどの特殊な機会と身体の関わりについては検討されてきたが、日常的な機会を対象とするものはまれである。この点ではフランス史・ドイツ史・日本史などの先行研究から学ぶべきことが大きい。ロシア史でも性規範については日常性と身体の関わりが分析されているが、1920年代の検討に集中している (ex. Frances Lee Bernstein, *The Dictatorship of Sex: Lifestyle Advice for the Soviet Masses*, DeKalb, Northern Illinois University Press, 2007)。本研究は、20世紀ロシア史における身体の経験を、日常的な

場において、長期にわたって分析対象とする点で前例がない。

本研究課題は、第二に、第一次世界大戦からスターリン体制の成立にいたる社会変動について、変化の側面と、従来の要素の維持や再生産の側面とを統合的に把握しようとする点で学術的独自性・創造性をもつ。大規模な社会変動の時代における変化と持続とが、身体のレベルでどのように結合していたのかを明らかにすることは、ロシア史研究ばかりでなく近現代史研究全般にとって大きな貢献となる。ロシア史以外の諸地域の事例と、比較研究を行なう可能性も開かれる。さらに、本研究の成果は、ナショナリズムやジェンダー研究にも貢献するであろう。

3. 研究の方法

本研究は、労働・医療・モラルという3分野に即して、第一次世界大戦から1930年代末までのロシアにおける身体の経験を分析する。労働と医療については、管轄省庁（商工省、労働省、労働人民委員部；内務省、保健人民委員部）の定期刊行物を主な史料とする。モラルについては、管轄省庁（国民教育省、教育人民委員部）、共産党（中央委員会扇動宣伝部）および青年組織のアーカイブ史料と定期刊行物を主な史料とする。くわえていずれの分野についても、同時代人による公刊の回想を調査した。同時代に製作された映画・演劇・文学作品における、身体の描かれ方や扱われ方にも注意を向ける。検閲の分析も行なう。

史料調査は主にモスクワのアーカイブと図書館で行なった。ただしCOVID-19により国外出張の予定は大きく減らさざるを得なかった。研究終盤ではロシア＝ウクライナ戦争が始まったことにより、ロシアの研究者との連絡も縮小することを余儀なくされた。

労働と医療については、申請者がこれまで実施してきた研究課題の成果を出発点とする。そのことを考慮に入れ、実施期間は3年間とした。

4. 研究成果

3でも記したとおり、COVID-19の世界的流行により、当初の研究計画と比べて、ロシアでの史料調査の機会は大幅に減らさざるを得なかった。そのような状況下ではあったが、第一次世界大戦期と1920年代・30年代に焦点を絞ることで、しかるべき研究成果を挙げることができた。それらはまだ活字にはなっていないが、その内容についてはすでに学会報告などを行なっている。まず、第一次世界大戦期の結核対策については、日本語および英語で学会報告を行なうことができた。そこでは、全ロシア都市同盟（都市自治体の全国機構）が国家機構と一体になって総動員体制を支えながら、兵士さらに一般市民の身体に対しても管理体制を強めたことが明らかにされた。当初は全ロシア都市同盟は、医療部門では、前線から後送された結核患者の介護に関心を集中させていたが、徐々に患者の家族の健康管理、さらには後方の都市全体の衛生改善へと、関心の対象を拡大していった。都市同盟にとって医療部門での一連の措置は、戦後ロシアにおけるより合理的に管理された都市空間・政治空間の創出を目指すものであった。次に、1920年代から30年代にかけてのロシア市民の身体について、アンドレイ・プラトーノフの未邦訳の長編小説『幸福なモスクワ』を主要な素材にして、分析を行なった。1930年代前半に書かれたこの小説は、革命・内戦期から1930年代初頭にいたる、共産党やアヴァンギャルド芸術家による性規範の刷新の試みを反映したものであった。プラトーノフ自身が内戦期にはヴォロネジで、新しい人間身体の創出を文学を通じて模索した人であるが、『幸福なモスクワ』には個人の快樂の拒否、他人の身体と自己のアイデンティティの同一化という、初期ソ連の身体理念が芸術的表現をとって打ち出されていた。報告者の手になる本作の翻訳および解説は、2023年1月に出版される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名	4. 巻 7
2. 論文標題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名	6. 最初と最後の頁 354-370
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 池田嘉郎	4. 巻 35
2. 論文標題 V. D. ナボコフとロシア革命	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 SLAVISTIKA	6. 最初と最後の頁 187-203
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00080013	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yoshiro Ikeda	4. 巻 Mar. 28-Apr. 3
2. 論文標題 Reviving the Empire: Putin Follows the Path of Stolypin and Stalin	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Nikkei Asia	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 池田嘉郎
2. 発表標題 第一次世界大戦期ロシアにおける保養地振興をめぐる政治
3. 学会等名 第70回日本西洋史学会大会（大阪大学、オンライン）、2020年12月12日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yoshiro Ikeda
2. 発表標題 The Sanatorium Movement, the Union of Towns, and the Envisioning of Post-War Russia, 1914-1917
3. 学会等名 NYU Jordan Center (online), 2021年4月26日 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yoshiro Ikeda
2. 発表標題 Yoshiro Ikeda, Why Jellinek? Why Germany? Russian liberals' quest for a constitutional monarchy in the early 20th century
3. 学会等名 Higher School of Economics, National Research University, St. Petersburg (online), 2021年11月25日 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Christopher Balme, Burcu Dogramaci, Christoph Hilgert, Riccardo Nicolosi, Andreas Renner, Yoshiro Ikeda et al.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Berlin: Frank and Timme	5. 総ページ数 272
3. 書名 Culture and Legacy of the Russian Revolution: Rhetoric and Performance - Religious Semantics - Impact on Asia	

1. 著者名 沼野充義・望月哲男・池田嘉郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 890
3. 書名 ロシア文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------